

標準商品論と転形問題の位相
—スラッファとマルクスの交錯—

石 塚 良 次

[1] 問題の所在

よく知られているようにスラッファ版の『リカード全集』が刊行されて以来リカード研究は大いに加速されたのですが、とくに彼の『商品による商品の生産』が1960年に出たからというもの、その影響はリカード研究のみならずマルクス解釈にも少なからぬ影

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| [1] 問題の所在 | 1 |
| [2] ピエール・ポルタのスラッファ解釈 | 2 |
| [3] 標準商品論の重要性 | 3 |
| [4] リカード解釈としての穀物比率論 | 5 |
| [5] スラッファ的解釈をめぐる論争 | 6 |
| [6] 転形問題と標準商品論 | 8 |
| [7] 「平均商品」と標準商品 | 10 |
| [8] ポルタ論文の意義 | 11 |
| [9] スラッファのリカード解釈と「合理的基礎」 | 12 |
| [10] マルクスとスラッファ：「敵対」か「共存」か | 13 |
| [11] マルクス価値論研究の新潮流 | 14 |
| [12] むすびにかえて | 16 |
| <編集後記> | 20 |

響を及ぼしてきています。それに対して、これはあるいは私の勉強不足かもしれませんが、日本ではリカードウ研究がマルクス研究に大きな影響を与えるという関係はなかったように思います。欧米にみられるようなリカードウ研究とマルクス研究との緊張関係が日本には存在しない。

本稿ではそのようなスラッファ以降のリカードウ研究が欧米マルクス研究に与えたインパクトを再検討したうえで、そこから何を学ぶべきか、を考えてみたいと思います。

そのためには研究史を時系列的に再構成してゆく、という方法も考えられますがそれではいささか平板になりかねませんので、ここではピエール・ルイギ・ポルタが History of Political Economy に書きました論文「ピエロ・スラッファの標準商品論の意義の理解について」で主張されているいくつかの命題の検討を手がかりにし、その都度周辺の文献に言及しつつ論点を敷衍し、議論をすすめて行くという形をとりたいと思います。幸い、History of Political Economy の同じ号には Groenewegen(1986), Dostaler(1986), Faccarello(1986) のコメントとそれに対するポルタ (1986b) の返答も載っておりますのでそれらも参照してゆきます。

【2】ピエール・ポルタのスラッファ解釈

著者ポルタという人物については実は私も詳しくは知らないのですが、1985年に刊行されたカラヴァーレの編集した Legacy of Ricardo にも寄稿していますので、むしろそちらの論文の方がポピュラーかと思います。The Debate on Ricardo: Old Result in New Frameworks という論文ですが、今日取り上げる論点もすでに、控えめにですが、そこに書かれております。彼はミラノ大学の准教授 Associate Professor で、イタリア語での『リカードウ全集』の編集にも携わったようです。

さて、ポルタの論文のどこが興味深いかという点ですが、その要旨はふたつに要約しうると思います。まず第一には、スラッファの標準商品論についてですが、言うまでもなく通常これはリカードウの不変の価値尺度問題への解答であると理解されていますし、またスラッファ本人もそう言明しております。しかしながらポルタに言わせればそうではなく、標準商品論というのはリカードウではなくむしろマルクスが提出した問題への解答なのだ、というわけです。

しかも第二に、これは第一の論点のコロラリーかもしれませんが、いわゆる剰余アプローチは、これも通常考えられているのとは異なり、マルクスに始まると主張しています。つま

り、リカードウ→スラッフアの線を消して、マルクス→スラッフアという線に書き換えようというわけです。

これは言い換えると、スラッフアのなりカードウ解釈というのは偽装されたマルクスだ、というわけです。そしてこの、マルクスにリカードウ的な衣を着せるという試みはドミトリエフに始まる、とも言っております。かつてスラッフア版の『リカードウ全集』が出た直後にハチスン(1952)が書評を書き、その中で、なぜこれがモスクワ国家出版局(the Moscow State Publishing House)ではなく、ケインズによって王立経済学協会(the Royal Economic Society)から出版されたのか、といった趣旨のことを述べております。ハチスンと立場は違いますがポルタもその点に限って言えば同意見ということになります。

私にとって興味深いのは、このようなポルタの主張のうちに、今日の欧米におけるマルクス研究のおかれた微妙な立場をみてとれるからです。その点についてはまた後に論ずるとして、もう少し詳細にポルタの主張を追って行きたいと思います。

まず話は前後しますが、第二の点、剰余アプローチがマルクスから始まるという論点ですが、この問題自体は重要な争点とは思えませんのでここでは簡単に触れるにとどめます。剰余アプローチというのはガレニャーニ(1984)が簡潔に要約しているところによれば、賃金を社会的生産物の決定から独立に労働者の生存水準で決まるものとし、社会的生産物からの必要消費物の差額を剰余とみなすとらえかたです。ガレニャーニ(1984)などはケネーの貢献を強調しておりますし、Aspromourgos(1986)は通説からさらに踏み込んでペティにすでにかなり明確な形で剰余アプローチが存在することを主張しております。しかし、マルクス以前に剰余アプローチの萌芽が見られるということは、そもそもマルクスが『剰余価値学説史』で主張したことから、そのこと自体にはポルタも異論はないようですので、争点はどこで太い線を引くかという相対的な差異に過ぎないと言えるでしょう。

[3] 標準商品論の重要性

そこで主要な論点である、標準商品論の理論的意義ですが、スラッフアの間では標準商品論それ自体はあまり重要ではない、とする見解が支配的なようです。たとえば、Savran(1979)と Steedman(1979)らが Capital & Class 誌上で交わした論争のなかでも、スティードマンは「標準商品はスラッフアの議論のどの部分に対しても本質的ではない」(Steedman, 1977, p.71)と言い切っております。またスラッフア経済学の入門書を書いている Mainwaring(1984, p.68)なども標準商品論の意義に対して否定的です。あるいは、——これは反スラ

ッフィアの立場からですが——所得分配分析における標準商品論の有効性に対する批判もたとえば、Flaschel(1984)などに見受けられます。

なによりも、スラッファ自身『商品による商品の生産』の43節で「標準体系は、純粹に補助的な構成物」であると書いております。スティードマンなどはその文言を論拠にしています。また、スラッファは同じくその本の「序文」で、「中心的な命題」に対して「特定の論点 particular points」のひとつとして「標準商品」をあげています。ポルタは、ロンカッリアなどはその文言を援用して標準商品論は主要な命題ではないと言っているが、しかしそこではただ「特定の論点」といっているだけで、重要な論点ではない、と言っていない、との解釈をしています。いずれにせよ、ポルタは通説に逆らって、スラッファ自身にとっては標準商品の意義は重要であったといい切っております。

さて、その標準商品論ですが、ポルタはスラッファは彼の標準商品論をリカードウ研究の中から獲得してきたのではなくむしろ逆であり、標準商品論が形をなしてきた後にリカードウの穀物比率利潤論を思いついたのだと言います。ポルタはそれを傍証するために『商品による商品の生産』の「付録D」から引用します。そこでスラッファは以下のように書いています。「リカードウの理論の上のような解釈——穀物比率利潤論(引用者注)——が、自然の結果として念頭に浮かんだのは、現在の研究の過程で、標準体系および基礎財と非基礎財の区別が明らかになってからのことにすぎなかったということをおそらく述べておいてしかるべきである。It should perhaps be stated that it was only when the Standard system and the distinction between basics and non-basics had emerged in the course of the present investigation that the above interpretation of Ricardo's theory suggested itself as a natural consequence.」(訳文は、菱山・山下訳をかりた。邦訳155頁)

しかも、そのことに加えて最近ではリカードウは穀物比率論をとっていないとする研究が出てきている。したがって、標準商品論がリカードウ研究からえられたのではないということが、まず第一にスラッファ自身の証言によって、次には、リカードウ自身にそれが無い、ということによって論証されます。ここでは第二の論点をもうすこし立ち入ってみておきます。というのも第一の点、つまりスラッファ自身の証言は余りにも少なすぎて、証拠能力に乏しいと思われるからです。ちなみにポルタはスラッファがケンブリッジで1920年代に行なった講義原稿からも引用しておりますが、彼が引用している範囲ではそこでもスラッファがこの問題について明瞭な証言をしているとは思えません。

[4] リカードウ解釈としての穀物比率論

あるいは、以下のような解説はまったくの蛇足かと憚られますが、後の論点にも関わってきますので、スラッフアの穀物比率論に簡単に言及しておきます。リカードウは1815年2月24日に発刊された『穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論』のなかで「資本の一般的利潤は、土地に投下された最後の資本部分の利潤にまったく依存する」（『全集』第四巻）と書いていますし、14、5年の手紙のなかでもそう述べている。スラッフアはそれを、農業の利潤が他の資本の利潤をも決定する、という農業利潤率決定論ととらえます。そのうえで、スラッフアは次のように推論します。少し長いですが、『全集』の編者序文から引用しておきます。論点がふたつ含まれていますので、二段にわけて引用します。

「農業利潤のもつ決定要因としての役割の原理の合理的基礎-rational foundationは、これについてはリカードウはかならずしも明瞭に述べているわけではないが、農業においては穀物という同一の商品が資本と生産物との両者を形成している、したがって総生産物と前貸しされた資本とのあいだの差額による利潤の決定、および資本にたいする利潤の比率の決定もまた、価値評価の問題とはなんらかかわりなく、直接に穀物の分量間でこれを行うことができる点にある。」つまり、投入も産出も同一の物的属性をそなえた商品からなっているという点。いわば「物量比率利潤論 material profit rate」というべき側面。これが第一点で、後の『商品による商品の生産』での標準商品論につながります。

つづけてスラッフアは書きます。「ただ一つの産業だけが他の諸産業の生産物を使用しないという特殊な状態にありうるのに反し、他の諸産業はすべてその一つの産業の生産物を資本として使用しなければならない、ということは明白である。」これは、同じく『商品による商品の生産』の概念で言い表せば、基礎財と非基礎財との区別の問題です。つまり、ここでは唯一穀物のみが基礎財である、というわけです。したがって農業利潤率決定論には以上のふたつの側面がある。そのうえで、スラッフアは次のように論定します。

「そこでこういうことになる、すなわちもしすべての産業に均等な利潤率が存在すべきであるとすれば、穀物の栽培において樹立されたと同じ利潤率を生じるよう調節されなければならないのは、他の産業自体の資本と比較した（すなわち穀物と比較した）それらの産業の生産物の交換価値のほうである、というのは、農業においては、生産物も資本もともに同じ商品から成立しているのです、いかなる価値変化も資本にたいする生産物の比率を変更しえないからである。」(xxx)つまり、穀物のみが基礎財ですので他の部門の利潤率は穀物を生産する農業部門の利潤率によって決定されるというわけです。

スラッフアの推論は非常に明快なのですが、あまりにも簡潔すぎてそれだけを読んだのでは理解しにくいのではないのでしょうか。しかしながら、『商品による商品の生産』での標準商品論および基礎財と非基礎財との区別という考え方を重ね合わせれば容易に理解できると思います。

いずれにせよ、『商品による商品の生産』の概念でいえば、標準体系論的発想、——もちろん標準体系論と穀物比率論とは違いますが投入と産出との物的同一性に基づくマテリアル・レイトという発想はおなじみですので、こうのべておきます——および基礎財と非基礎財との区別、これがリカードウの農業利潤率決定論の「合理的基礎」である、というわけです。後にまた触れますがこの「合理的基礎 rational foundation」という点がスラッフイアンと反スラッフイアンとの論争を理解するうえで重要です。

それはさておき、いまここで問題なのは、スラッフア自身も言明しているように、リカードウは現存する手紙や論文のどこを探しても上に述べたようなスラッフアがいう意味での穀物比率論を書き残していない、という点です。スラッフアは失われた1814年3月の「資本の利潤に関する論文」のなかかそれとも会話のなかかで、このことを定式化していたであろうと推理しています。その根拠はマルサスのリカードウ宛の手紙です。マルサスはこう書いています。1814年8月5日の手紙です。

「どんな生産物のばあいにも、生産物が前貸しされた資本とまったく同一の性質をもつということはありません。したがって……生産物の物的比率について述べることはけっして正当ではありえません。……土地の特殊な利潤あるいは土地の生産物の率が資本の一般利潤と貨幣の利子とを決めるのではない……」。マルサスは、あなたのおっしゃる穀物モデルのような事態は実際にはありえないとして、リカードウを批判しています。したがってこれは、リカードウが定式化したことの「繰り返し echo」であるとスラッフアはいうのです。

[5] スラッフアの解釈をめぐる論争

つまりここでのスラッフアの論証の仕方はマルサスの言葉を借りた間接的証明というわけですから、やはりいま一步というもどかしさを感じます。70年代に入ってから、ホランダー(1973)の批判が出、それにたいしてスラッフイアンからの反批判が出され論争が展開されました。ホランダーの1973年論文に対しては Eatwell(1975)が反論しますし、Garegnani(1982)も反論する。それにたいして、ホランダー(1975, 1983)が再度答え、それに対してまた Garegnani(1983)が答える、という具合です。

またその後には、スラッフイアンから Langer(1982)や Bharadwaj(1983), deVivo(1985b), Prendergast(1986)らが論争に加わっております。しかしながら、Langer(1982)や deVivo(1985b)あるいは Groenewegen(1986)などにしても、トレンズが1819年のエジンバラ・レビューに書いた評論のなかで穀物比率論を扱っており、それはリカードウの影響によるものだ、と主張してみたり、また Prendergast(1986)のようにマルサスの『原理』を使ってスラッフア説を擁護してみたりしているのですが、いずれも論証の基本的な構図はスラッフアのそれと変わらず、リカードウ自身の文言ではなくそれに反対したりそれから影響を受けたりという相手の文言からの間接的証明です。したがってやはり隔靴搔痒の感は否めません。論争の過程で結局リカードウがそのように主張したという決定的証拠は出されなかったと私は判断しております。(Groenewegen(1986 p.456)は逆に決定的批判は出ていない、と主張しています。)

さて、そこで改めてスラッフアのリカードウ解釈への批判ですが、ここではファッカレロ(1982)の批判を取り上げておきます。というのも最近でこそたとえば Peach(1984)などのような立場からのスラッフア批判がでてきましたけれど、それまではスラッフアの穀物比率論への批判というのは以外に少なく、ホランダーぐらいなのです。しかし、ベン・ファイン(1983)が評しているように、ホランダーのスラッフア批判というのはリカードウにたいする新古典派的レトロスペクティブからの解釈に基づく批判との印象がよい。ですからそのようなバイアスのないファッカレロのスラッフア批判は貴重な批判ということになります。

ファッカレロの批判はこうです。スラッフアはマルサスのリカードウ宛の手紙のなかのリカードウ説を本来のリカードウの理論の正確な反映とみなしているが、そもそもマルサスとリカードウはパラダイムが違う。したがって、スラッフアが援用するマルサスのリカードウ解釈は実は誤解に基づくものなのだ、というわけです。ファッカレロのこの批判は重要な点をついていると思われまふ。マルサスがリカードウについて述べていることがらそのままリカードウの実像であるとみなすとしたらそれはあまりにも素朴にすぎると言わざるをえません。

いずれにせよ、ポルタはそのような諸研究に依拠しつつ、リカードウは実際にはスラッフアが理解するような不変の価値尺度の探求という問題意識をもってはいなかったと論定します。なぜならリカードウはそのような尺度を決定するのは不可能であるとしていたからであり、『原理』の第一章六節でいわれる「固定資本がほとんど使用されぬ一方と、労働がほとんど使用されぬ他方との、……ちょうど両者の中間をなす物 just mean」(羽鳥・吉澤訳、岩波文庫版 pp.94-95) という例も、そのようなジャスト・ミーンは現実には存在しないというこ

とを言わんとしているのだというわけです。

本来ならばここで、さらに『原理』におけるリカードウのいわゆる「価値修正論」とスラッフアの標準商品論との関係に言及すべきところかもしれませんが。しかしながら、ここでは初期のリカードウにおいてさえマテリアル・レイトという発想は存在しない、という論点を提示するにとどめ、先を急ぎたいと思います。

[6] 転形問題と標準商品論

さて、以上のようなわけで、ポルタによれば標準商品論はリカードウとは無関係というわけですが、では標準商品論はなにゆえマルクスの問題への解答だというのか。ここでポルタは転形問題を持ち出してきました。転形問題についてはいまさら解説めいたことを書き連ねる必要もないでしょうし、またその紙幅ありません。ここでは論点に直接切り込みます。

順序はポルタの記述と前後しますが、標準体系がなぜ転形問題を解決するといいうのか、ポルタの主張をまず見ておきます。

ポルタは以下のような数式を示します。

$$p(I-A)X=I \quad (1)$$

ただし、 p は生産価格ベクトル、 A は直接投入係数行列、 X は標準体系における総産出ベクトルです。この式はつまり標準純産出を生産価格で評価したものを I に基準化しニューメールとしたわけです。

ここで総産出に含まれる直接労働量は I に等しいと置く、すわなち

$$lX=I \quad (2)$$

ただし、 l は投入労働ベクトルです。ところが lX は対応する純産出に含まれる総労働量(すなわち価値)に等しいわけですから、(2)式は、 $l(I-A)^{-1}=v$ を考慮して、

$$v(I-A)X=I$$

となります。つまりこの場合においては純産出は価格で表示されても価値で表示されてもお

なじであることとなります。ポルタの言葉を引用すれば「標準商品 X にたよることの有利な点は——「穀物」を生産するのに「穀物」を用いるシステムにおいて生じるであろうように——それが純産出のスカラー倍であり、したがって（純産出について言明されたのとちょうど）おなじ仮設が、マルクスが要求したように、総産出についても同じく真実であるという点である。」(Polta, 1986, p.450)さらに、賃金が標準商品からなると仮定すれば、総計一致2命題（総剰余価値＝総利潤、総価値＝総価格）が両立するというわけです。（ただし、うへの式において A が賃金財投入をも加えた拡大投入係数行列ではなく、上記の方程式は賃金後払いのスラッファ型価格方程式であることをポルタは明記してはいない。パシネッティ(1977)訳 pp.128f 参照。）

しかしながら、これは決してポルタが初めて言い出したことではありません。ポルタも脚注に記しておりますが、この数式それじたいもパシネッティ(1977)のもの（使われている記号が違うだけで）まったく同じです。というよりも、ある時期以降の、転形問題の数学的解答と称するものが、じつは数学的構造としてはまったくおなじ形式に帰着する、すなわちスラッファの標準体系とおなじものになっているのです。このことは、1982年に Bradley と Howard の編集で出されたミークの記念論文集に寄稿した J.E.King(1982)の論文 *Value and Exploitation: Some Recent Debate* がかなり明瞭に整理していますので、ここで紹介しておきます。

キングによれば、総計一致2命題の両立がいろいろなのは以下のケースに整理されます。

- (a) 経済が3部門に分割され、第三部門の金製造部門の資本構成が社会的平均に一致するというポルトケヴィッチ(1907)の場合。
- (b) サムエルソン(1971)のいうすべての産業における「資本の均等な内部構成」の場合。
- (c) 森嶋通夫(1973)のいうすべての産業の「一次従属」の場合。
- (d) 森嶋=カテフォレス(1978)によって示唆された標準化手続き。
- (e) 藤森頼明(1977)の「キャパシティ・アウトプット」がウエイトとして用いられる場合。
- (f) スラッファの「標準商品」がニューメレールとして用いられる場合。(ミーク(1961)、メディオ(1972)、イートウェル(1974-5))
- (g) スティードマン(1977)のいう「ただ、すべての資本財に投下された労働が、直接的あるいは間接的に賃金バンドルの生産に使われた資本財によって支配される労働に等しい場合」。

(h) 経済がフォン・ノイマンの均衡成長経路にある場合。(森嶋(1974)、森嶋=カテフォレス(1978))

もうすこし加えてみたいような気がしないこともありませんが、キングがあげているのは以上です。さてこのうち、(a) は余りにも恣意的な仮定で特殊ですから捨てます。(b) は (c) の特殊ケースです。そこで残りのケースのうち (d) から (f) ですが、じつはこれはいずれも同じ標準体系の異なった定式化に過ぎないのです。さらに、(h) のノイマン経路は実際には標準商品を生産するわけですからこれも標準体系の特殊ケースです。(g) については経済学的意義はないでしょう。) 私としてはこれにクラウゼの「標準還元」の手続きをも加えておきたいと思います。

したがって、ポルタがここで主張している標準商品論の転形問題への貢献というのは、じつはかなり以前から一般的に言われていたことであります。しかしながらここでポルタの説の独創性をあらためて強調しておけば、リカードウの不変の価値尺度の問題への解答であった標準商品論がマルクスの転形論にも適用される、というのが従来解釈であったのにないし、ポルタは標準商品論はむしろリカードウではなくマルクスの転形問題への解答なのだ、と百八十度ひっくり返した点です。

[7] 「平均商品」と標準商品

話は前後しますが、ポルタは以上のような標準商品論の転形問題への貢献を論ずるに先だって、マルクスが『資本論』三巻十章の冒頭でのべている「平均的な構成Durchschnitts-zusammensetzung」という概念に注目します。マルクスによれば、そのような生産部面では価値と生産価格とがひとしくなるし、また他の生産部面での利潤率はこの平均的構成をもつ生産部面の利潤率に等しくなる。ポルタはこの「平均商品」を重視します。つまり、これこそスラッファがいう標準商品の原型であるといいたいのです。

しかしながら、このような主張もまた存外に古くポルタのオリジナルではありません。上述したキングの整理にもでてきたメディオのいう ω^* 産業が典型的な例です。また、イートウェル(1974)もマルクスの「平均的構成」とスラッファの標準商品との関連について言及しております。

ところが、このマルクスの「平均的構成」とスラッファの「標準体系」との類似性はさらに早くミーク(1961)が指摘しています。これはスラッファの『商品による商品の生産』が出た翌年です。ミークは「スラッファ氏による古典派経済学の復興」と題された論文で以下の

ように書いております。要約しますと、マルクスは「資本の平均的な有機的構成」を論じてはいるが、そこでは費用価格の生産価格化の問題は論じられていない。したがって、リカードウが問題にした賃金の変化が充用生産手段の価格に及ぼすはずの影響を捨象しているので、「平均的構成」の産業部面で価値と価格が一致するということは近似的にしかいいえない。ところが、スラッファの標準体系をもってすればこの問題は解決する。ミークは以下のような言葉でその論文を結んでいます。

「この観点からすれば、スラッファの「標準」産業というのは、本質的には、マルクスが探求していたのと同じ結論に到達するような仕方で、「平均的な生産諸条件」を定義しようとした一つの試みなのである。」(訳265頁)

(このような「解釈」をミークはスラッファの『商品による商品の生産』を刊行直後に読了し、思いついたと考えることは難しい。スラッファは、草稿段階でミークにそのアイデアを伝えていたと考えるのが自然であろう。したがって、ミークのこの「書評」には実はスラッファ自身のサジェスションがあったと付度しうるのではないか。)

[8] ポルタ論文の意義

以上のように見てきますと、ポルタの言っていることにはなんの新奇さもなくなってしまいかねませんが、あえてあげれば、くりかえしになりますが、スラッファはリカードウから着想をえたのではなく、マルクスからなのだ、という点なのですが、実はこういう発想にも先駆者がいます。(ただし、ここでは新古典派のサイドからの同様の批判は除外します。)の Henz D. Kurz の「スラッファ・アフター・マルクス」(1979)です。題名から推察されますように、スティードマンの有名な『マルクス・アフター・スラッファ』への批判的評論です。Kurz はこのなかで、スラッファの剰余理論はマルクスからきていることを主張しており、スティードマンの本には「スラッファ・アフター・マルクス」の視点が欠落していると批判しています。ちなみに彼はスティードマンのいわゆる「負の価値」についても市場的な競争を考慮した「生産性インデックス」なる変数を持ち込むことによって、かなり明快な反論をしています。

というわけでポルタの主張はどれをとっても特に独創的というわけではありませんが、あえてそれをとりあげたのは、彼のスラッファ解釈——つまりスラッファのリカードウ像は偽装されたマルクスだ——というスラッファ解釈は、それまでインプリシットな形で出てはいた、欧米マルクス主義者のスラッファ理解の一側面を明瞭にのべていると思われるからです。

そしてまたそこに今日のマルクス価値論研究の問題点が集約されているように思います。

〔9〕スラッフアのリカードウ解釈と「合理的基礎」

そこで、以下ではポルタから離れて話はマルクス価値論研究に入るわけですが、その前に、スラッフアのリカードウ解釈にもうひとこと言及しておきます。それは、さきにもすし触れた「合理的基礎」という問題です。つまり、スラッフアの穀物比率論・標準商品論というのは、リカードウが実際にいったことではなく、リカードウが言ったことにもし合理的な根拠が与えられるとしたらこういうことになるのではないかという試みである、ということです。この点については、スラッフア批判者のうちに誤解がみられるようで、例えば Bhara-dowaj(1983)——彼女はスラッフイアンですが——なども、脚注のなかでホランダーがスラッフアの文言を曲解している——スラッフア自身が慎重に表現を選んでいるにも関わらず——として批判しています。つまり、リカードウ本人が自覚的に穀物比率論を主張しているとはスラッフア自身も考えていないのです。

したがって、実はホランダーとスラッフイアンとの穀物比率論をめぐる論争も、単にリカードウが何を言ったか、という問題に躊躇するならば、スラッフアの本来の問題提起からずれてしまいます。リカードウが実際に何を言ったか、を忠実に再構成する、という課題が重要なことは言うまでもありませんが、リカードウが提出した命題に「合理的基礎」をあたえるというスラッフアが設定した課題もそのような事実問題から相対的に独立して成立することも認めなくてはならないのではないのでしょうか。

そしておそらく、この「合理的基礎」という問題は、マルクス価値論研究に際しても重要な意義をもってくると思います。たとえば Mandel は『リカードウ・マルクス・スラッフア』の序文のなかで、スラッフアの業績の意義について触れながら、それに対してマルクス主義者のなかには、“X is true because He said so” というドグマチックな反応がみられることを指摘しています。スラッフアのリカードウ解釈、あるいはスラッフイアンのマルクス解釈に対してそのような、一次元的対応しかしえなかったら、論争は不生産的なものに終わるでしょう。マルクス研究に際しても、マルクスそのひとが述べたことからの逐語的再構成という課題とともにその合理的基礎の構築という課題が成立すると考えられます。

[10] マルクスとスラッファ：「敵対」か「共存」か

さて、ではそのうえで、標準商品論がマルクスの価値論解釈に対しても「合理的基礎」を付与しうるか、という問題を検討してみたいと思います。スラッファが標準商品論をどのような文脈から引き出してきたのか、という「発見の心理学」(ポパー)はこの際おいておきます。まず、ベン・ファインがファッカレロのスラッファ批判論文によせたコメント(1983)を参照しておきます。そこでファインは、スラッファのリカードウ解釈は誤解だし、したがってスラッフィアのマルクス解釈、ステードマンのような解釈も誤解であるとしております。つまり、ファインはスラッファのリカードウ解釈は cornification —— とりあえず「穀物化」と訳しておきます—— でありしたがって reification つまり「物象化」なのだ、と書いております。しかも、その穀物化としての「物象化」が初期リカードウだけではなく、後期のリカードウにまで適用される。ところが、後期のリカードウは労働価値説を採用しているし、価値尺度としては貨幣を近似として用いている、というわけです。しかしながら、スラッフィアンの解釈はその「労働」までをもコーニフィケーションしてしまう、というのです。つまり、私が言葉を補って言えば、価値実体としての労働の物象化的錯視ということになるでしょうか。

ファインのいうコーニフィケーション、これをマルクス価値論解釈に導入した研究者はすくなくありません。ドップ、ミークがおそらくリストの最初に名を連ねるのは間違いありません。そのほかにも最近では、多くの名前があげられるでしょう。しかしながら、そこですこし難しいのは、本人はスラッフィアンとは思ってはいなくとも第三者から見ると事実上コーニフィケーションとみなさざるをえないという人もすくなくないからです。いずれにせよ、ドップやミークがスラッファ理論を高く評価したのはそれによって転形問題が解決され、ひいてはマルクス労働価値論に堅固な合理的基礎が与えられると、考えたからでありましょう。

そして同時にそのような立場はリカードウとマルクスとのプロブレマティクの連続性を強調することになります。

ここでは、スラッファがリカードウに与えた「合理的基礎」がリカードウにたいして適切であったか否かの問題は留保し、はたしてマルクスにとっての合理的基礎たりえるか、に問題を限定します。

この設問に対する答えとしては、上述しましたドップ、ミークのような立場を間に挟んで大きく分ければ三つ立場が成立します。ドップやミークの立場はスラッファとマルクスの理論は対立するものではない、という「共存」派です。本稿で紹介いたしましたポルタヤイー

トウェルなどもその近くにいますが、ポルタはマルクス寄り、イトウェルはスラッファ寄りということになります。

そのような立場に対して、スラッファとマルクスの共存可能性を批判する立場があるわけですが、これがさらにふたつに分かれます。まず、右側は—— というと語弊があるかもしれませんが—— スラッファのサイドからマルクス労働価値説を批判する立場であり、典型的には、スティードマン(1977)がいます。

その批判を要約すれば、まず第一に生産価格は投入係数行列と分配率のデータから算出可能なことから価値計算という回り道はリダンダントだという消極的批判、そして第二に、結合生産を想定して価値計算をおこなえば負の価値が生ずるのだから、価値計算はそもそも誤りだという積極的批判、ということになります。スティードマンは自らのマルクス批判のことを Sraffa-based critique of Marx (Steedman, 1977, p.23)と呼んでいます。この批判によって、スラッフィアの側から、スラッファ理論はマルクス価値論を正当化するものではなくむしろそれを批判するものだという問題が提出されたわけです。

[11] マルクス価値論研究の新潮流

さらに、その左側にマルクス派の立場からスラッファ理論でマルクスをジャスティファイすることは不可能である、という主張がだされております。先ほど出しましたベン・ファインなどもそのひとりですが、この立場の人々はさらに積極的にスラッファ理論の批判へと向かってゆきます。

私としては、スラッファ的なりカードウ研究がマルクス研究に与えたインパクトとして最も重視したい点は、ポルタのようにスラッファ理論を直接マルクス理論の解釈に利用しようとする立場よりも、逆にそのような読解を批判することによって、いわば彼らを反面教師として、マルクス理論の独自性を強調する立場が現われてきた、という点です。ドップやミックあるいはポルタやイトウェルの立場は、かたやスラッフィアン、他方ではマルクス派の両サイドから挟撃されてたいへん苦しい立場に立たされるのではないのでしょうか。

さて、そこで、上述したような、リカードウに対するマルクスの差異を強調する立場からスラッフィアンのマルクス解釈を批判する論客としてはどのような人々がいるかといいますと、これはフランスに多く見受けられますが、ジャン・カルトリエやカルロ・ベネッティ、あるいは先ほどのファッカレロ、ベルギーのプロワなどですが、ここではブリュノフの論文を中心として彼らの批判の中から浮上してきたマルクス価値論の独自性にどのような論点が

数え上げられるかを見ておきます。

彼女は、La monnaie chez Marx (1973) というマルクスの貨幣論を扱った本で知られております。リカードウ＝マルクス関係を扱ったものでは、Brunhoff (1973) が代表的ですが、そこでの主張で最も注目すべき点は、リカードウやスラッファの体系では所与とされている商品という概念をマルクスは「問題」として取り上げているのだとしている点です。この論点は必ずしも十分に掘り下げられてはいませんが、彼女は史的唯物論とのつながりを強調します。

それからもう一点注目すべきは、現実の経済システムにおける貨幣の働きの問題を強調していることです。周知のごとく、スラッファの理論体系の中には貨幣は現われてまいりません。マルクスにおける貨幣論的視角の重要性は、Dostaler (1986) など指摘しておりますが、その意味では、マルクスはむしろケインズ理論と共通性をもつと Dostaler は主張しますが、その意味では、マルクスはむしろケインズ理論と共通性をもつと Dostaler は主張します。マルクス理論を貨幣数量説的なダイコトミー批判であるとする見解もこの派に特徴的です。つまり、まずはじめに貨幣なき実物的世界での均衡を考えて、その次に上からヴェールとしての貨幣が重ね合わされる、そのような二元論の図式はマルクス解釈に際しても生産と流通との二元論的切断としてしばしば見受けられたのですが、マルクス本人は決してそのようなダイコトミーをとってはいない、とする考え方です。Lavoie (1983,1986) などがこの点を強く強調します。この論点も貨幣ではなく合成商品を価値尺度にすえるスラッファ理論との対峙を通して明確に意識されてきた点の一つではないでしょうか。スラッファ理論が dualism であることは Ganssmann (1983) など指摘しております。

また、de Brunhoff (1974-75) はイートウェル (1974-75) への批判的コメントですが、ここではマルクス価値論における抽象的人間労働概念の意義を指摘しております。この点もスラッファ理論ではいわば具体的有用労働と抽象的人間労働との区別がされていないことへの批判として明確に浮かび上がってきたように思います。プロワ (1982) などがとくに強くその点を強調しております。この問題は先に指摘した貨幣論の問題とつながっております。つまり、スラッファ体系における貨幣の欠如と抽象的人間労働概念の欠如は同じ事柄の両面である。言い換えれば、抽象的人間労働というのは生産の現場で直接に投下される労働それ自体ではなく、市場で貨幣との交換を媒介として、社会的に措定される労働であるということであり、この点は特にクラウゼなどによって強調されています。この、価値の実体としての抽象的人間労働は、具体的な投下労働と一対一的に対応するものではない、という点は結合生産における「負の価値」というアポリアを持ち出してのスティードマンなどの批判に応酬する際に重要になってくるかと思えます。

[12] むすびにかえて

ところでスラフフィアの労働価値説批判は生産の技術的条件と分配率が観察者によってすべて透明で直接に認識可能な世界を前提しているのではないかという点もしばしば批判されます。それは観念論ではないか、という Shaikh (1984) の批判などです。それにしてもそのようなスラフフィアのマルクス批判は本当にステードマンの言うようにスラフファに基づいた批判なのでしょうか。私としては、スラフファは分配率が決まれば生産価格が決まるということを主張しようとしたのではなく、逆に分配率がきまらなければ生産価格が決まらないということを主張しようとしたのではないかと思われまます。このふたつの命題はいずれにせよ同じことではないか、と言われるかも知れませんが、スラフファとヴィトゲンシュタインとの関係如何という問題に鑑みると、それは看過しえぬ問題のように思えるのです。この問題については菱山泉氏のたいへん刺激的な論稿から多くの示唆を得たのですが、大問題ですのでここでは指摘するにとどめます。

さて、翻って、日本の研究状況を省みるに、以上のべて参りましたように、欧米ではスラフフィアからの批判を媒介として逆にマルクス派の側では抽象的人間労働の実体主義的把握の限界が自覚されてきたわけですが、日本ではそのような緊張関係が存在しなかったために、抽象的人間労働を社会的関係態として理解するということの必要性にたいする関心も薄いのではないのかという印象を受けます。つまり実体主義的価値論解釈が結局は価値論不要論に行き着いてしまうところまで議論が煮詰められることによって、実体主義批判の重要性が認識されてきたというのが欧米価値論研究の現状ではないかと思えます。(ただし、実体論批判の立場とスラフファ理論の生産分析と実物的剰余の理論が両立しうるとする Dostaler (1986) のような見解が少数派ではあるが存在することもつけ加えておかなければならない。)

最後に言い残した論点について触れておきます。ポルタの説「スラフファのリカードウ解釈は偽装されたマルクスだ」という説についてであります。私としてはこの点については十分な資料もなく判断する手だてがないというほかありません。しかしながらポルタのごとき解釈はスラフファの本意に反するのではないかと思えます。というのもスラフファが提出したかったのは、そのような論者の主観的な意図を越えて論理の客観的な厳密性であったのでしようからです。

[注] 本稿は、1987年10月17日に行われた経済学史学会関東部会での報告、「欧米価値論研究におけるマルクスとスラッファ」を元としている。幸いにして報告に関心をもってくれた何人かの研究者からは活字化せよとの慫慂をうけた。しかしながら、口頭報告という制約上簡単な言及にとどめざるをえなかった論点を敷衍する作業が必須と考え躊躇するうちに機会を逸してきた。公表に際して、一度は全面的な改作を試みたが、言及した諸論点、諸論稿について、より十全な論証を付加し、さらにその後の議論の展開をフォローすると、かなりの紙幅を要することが明かとなった。そこで今回は標題をより内容に即したものに改めた他は、文体の変更を中心とした最小限の加筆修正にとどめ、本格的な論文には別稿を充てることにした次第である。本稿はそのための「序論」と位置づけられる。

References

- Aspromourgos, T. 1986. Political economy and the social division of labour : the economics of Sir William Petty, *Scotisch Journal of Political Economy* 33:1
- Bharadwaj, K. 1978. Maurice Dobb's critique of theories of value and distribution, *Cambridge Journal of Economics*, 2.
- , 1983. On a controversy over Ricardo's theory of distribution, *Cambridge Journal of Economics*, 7:1
- Bredley, I. and Howard, M.C., ed. 1982. *Classical and marxian Political Economy*, Macmillan, London. de Brunhoff, S. 1973. Marx as an a-Ricardian : value, money, and price at the beginning of Capital, *Economy and Society*, 2.
- , 1973. *La Monnaie chez Marx*, 河合正修訳、『マルクス金融論』、日本経済評論社、1979年。
- , 1974-75. Controversies in the theory of surplus value : a reply to Eatwell, *Science and Society*, 38-4.
- Burmeister, E. 1984. Sraffa, labour theories of value, and the economics of real wage rate determination, *Journal of Political Economy*, 92:3.
- Caravale, Giovanni A. ed. 1985. *The legacy of Ricardo*. Oxford.
- Dobb M. 1975-76. A note on the Ricardo-Marx-Sraffa discussion, *Science & Society*, 38:4.
- Dostaler, G. 1986. 'From Marx to Sraffa' : comments on an article by P.L.Porta, *History of Political Economy*, 18:3.
- Eatwell, J. 1974-75. Controversies in the theory of surplus value : old and new, *Science and Society*, 38:3.
- , 1975. The interpretation of Ricardo's Essay on Profits, *Economica*, May.
- Elson, D. ed. 1979. *Value : the representation of labour in capitalism*, London.
- Faccarello, G. 1982. Sraffa versus Ricardo : the historical irrelevance of the 'corn-profit' model,

- Economy and Society*, 11:2.
- , 1986. Understanding Sraffa's Standard commodity : a comment, *History of Political Economy*, 18:3.
- Fine, B. 1983. On the economics of Ricardo and Sraffa, *Economy and Society*, 12:2.
- Flaschel, P. 1984. The standard commodity and the theory of income distribution : a critical note, *Australian Economic Papers*, 23.
- Fujimori, Y. 1977. Sraffa in the light of Marx, mimeograph, University of Josai.
- Ganssmann, H. 1983. Marx without labour theory of value, *Social Research*, 50:2.
- Garegnani, P. 1982. On Hollander's interpretation of Ricardo's early theory of profits, *Cambridge Journal of Economics*, 6.
- , 1984. Value and distribution in the classical economists in Marx, *Economic Papers* 36:3.
- Groenewegen, P.D. 1972. Three notes on Ricardo's theory of value and distribution, *Australian Economic Papers*, 11:18.
- , 1986. Professor Porta on the significance of understanding Sraffa's Standard commodity and the Marxian theory of surplus : a comment, *History of Political Economy*, 18:3.
- Harcourt, G. 1982. The Sraffian contribution: an evaluation, In *Classical and Marxian political economy*.
- 菱山泉、1976。「A. ロンカリアのヴィトゲンシュタインとスラッフアの関係に関する所説についての一試論」、『経済論叢』、118:5-6.
- Hollander, S. 1973. Ricardo's analysis of the profit rate, 1813-15, *Economica*, august.
- , 1975. Ricardo and the corn profit model : reply to Eatwell, *Economica*, may.
- , 1983. Profesor Garegnani's defence of Sraffa on the material rate of profit, *Cambridge Journal of Economics*, 7:2
- Hunt, E.K. 1983. Joan Robinson and the labour theory of value, *Cambridge Journal of Economics*, 7.
- Hutchison, T.W. 1952. Some questions about Ricardo, *Economica*, 19.
- King, J.E. 1982. Value and exploitation : some recent debates, In *Classical and Marxian Political Economy*, ed. by Bradley and Howard.
- Krause, U. 1979. *Geld und abstrakte Arbeit*, 高須賀義博監訳、『貨幣と抽象的労働』、三和書房、
1985. Kurz, H.D. 1979. Sraffa after Marx, *Australian Economic Papers*, 18.
- Langer, G.F. Further evidence for Sraffa's interpretation of Ricardo, *Cambridge Journal of Economics*, 6.
- Lavoie, D. 1983 Some strength in Marx's disequilibrium theory of money, *Cambridge Journal of Economics*, 7.

- , 1986. Marx, the quantity theory, and the theory of value, *History of Political Economy*, 18:1.
- Mainwaring, L. 1984. *Value and ditribution in capitalist economics*, Cambridge.
- Mandel, E. and Freeman, A. ed.1984. *Ricardo, Marx, Sraffa*, London.
- Medio, A. 1972. Profits and surplus value : appearance and reality in capitalist production, 上垣彰訳、伊藤誠他編『欧米マルクス経済学の新展開』、東洋経済新報社、1978年、所収。
- Meek, R.L. 1961. Mr.sraffa's rehabilitation of Classical Economics, 時永淑訳『経済学とイデオロギー』、法政大学出版局、1969年、所収。
- Morishima, M. 1973. *Marx's Economics*, 高須賀義博『マルクスの経済学』、東洋経済新報社、1974年。
- , 1974. Marx in the light of modern economic theory, *Econometrica*, 42.
- , Catephores, G.1978. *Value, explotation and growth*, 高須賀・池尾訳『価値・搾取・成長』、創文社、1980年。
- Pasinetti, L.L. 1977. *Lecture on the theory of production*, 菱山泉他訳『生産理論』、東洋経済新報社、1979年。
- Peach, T. 1984. David Ricardo's early theory of profitability : a new interpretation, *Economic Journal*, 94.
- Porta, P.L. 1985. The debate on Ricardo : old results in new flameworks, In *The legacy of Ricardo* ed. by Caravale .
- , 1986a. Understandig the significance of Piero Sraffa's Standard commodity : a note on the Marxian notion of surplus, *History of Political Economy*, 18:3.
- , 1986b. Understandig the significance of Piero Sraffa's Standard commodity : a rejoinder. *History of Political Economy* 18:3.
- Ricard, D. 1951-73. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by Piero Sraffa, with Collaboration of M.H.Dobb, vol.I-XI, Cambridge.
- Roncaglia, A. 1975. *Sraffa e la teoria dei prezzi*, 渡会勝義訳『スラッフアと経済学の革新』、日本経済新聞社、1977年。
- Sarvan, S. 1979. On the theoretical consistency of Sraffa's economics, *Capital & Class*, 7. Spring.
- Shaikh, A. 1984. The transformation from Marx to Sraffa. In Mandel(1984) .
- Sraffa, P. 1928-29. Lecture on the advanced theory of value. Michaelmas term. Manuscript.
- , 1951. Introduction to Volume I of Ricardo, 1951-73.
- , 1960. *Production of Commodity by Means of Commodity : Plelude to a Critiqu of Economic Theory*, 菱山・山下訳『商品による商品の生産』、有斐閣、1978年（復刊）。
- Steedman, I.1977. *Marx after Sraffa*, London.
- , 1979. On an alleged inconsistency in Sraffa's economics, *Capital & Class*, 9.

- , et al., ed. 1981. *The value controversy*, London.
- de Vivo, G. 1985. Robert Torens and Ricardo's corn ratio theory of profits, *Cambridge Journal of Economics*, 9-1.
- de Vroye, M. 1982. On the obsolescence of Marxian theory of value : critical review, *Capital and Class*, 17.

<編集後記>

10月下旬に締め切った今年度の社研年報は、予定の枚数を大幅に超過した原稿をいただきました。大学改革に関わる会議等で研究のための時間を削られがちな昨今ではありますが、所員の活発な研究活動が寄せられたことは、編集子のよろこびではあります。とはいえ、予算制約を考えると頭の痛い問題がないわけではありません。なるべく読みやすい原稿、とりわけ図表に関しては誤植などが生じないような原稿を用意していただきたく思います。月報に関しては、フロッピー原稿を受け付けておりますので編集委員にご相談下さい。編集、校正の作業が合理化されます。(R.I.)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 麻島 昭一

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
